

# 女性のアイデンティティの確立と社会力の構築 —人生の樹をどう育てるか—

春日 美奈子（子ども心理学科・教授）・大野 和男（児童学科・准教授）

## I. 研究の目的

かつてルーズ・ベネディクトは日本人論の代表作として有名な著書「菊と刀」(1946)の中で、日本の文化を「恥の文化」と表現した。儒教文明圏に生きる日本人の行動規律は恥の文化にあるとし、日本人は自分が他者からどのように思われているのかを意識し、世間体を気にしながら善悪を判断すると皮肉って表現している。しかしこれを深く考えれば、日本人の恥じらいとは、他人を思いやる心を基礎として相手に不快な思いをさせない細やかな気遣いが根底にある。これが長く日本人の心として大切にされてきた。そして、つましき・奥ゆかしさを含めその言葉を表現する代表的な存在が日本女性でもある。

1986年（昭和61年）4月1日に施行された男女雇用機会均等法によって女性の社会進出が促進されたが、その一方で古くから大切にされ受け継がれてきた日本女性特有の精神が薄くなってきている。社会進出にともない女性の意識もそれに対応し充分高まっているのだろうか。自由社会において、各人の中に体系的・内在的に確立された行動規範がある。自分の行動規範にしたがって責任をもって行動することが自由社会の基本とされることでもある。自分がとった行動についての結果は、本人自らその責任を負わなければならない。与えられた権利には、必ず責任が付くことを忘れてはならない。

女性が社会で活躍する道は確実に広がり、人生の選択肢は一昔前に比べて格段に広がりをみせている。生き方の選択肢の増加に対して、個人の主体性がともない各人の行動規範の質が問われるようになる。家庭も仕事も子育てもこなす女性が増えてきているが、そのバランスを取ることは容易ではないのが現実でもある。子どもにとって母親の存在は大きい。母親の愛情と養育は、子どもの基本的な安心感や社会性の土台となる力を養う上で決定的な役割を果たす。それゆえに女性の人間としての成熟が必要になる。

人の成長は、木の成長とも似ている。一本の樹が多くの年輪を刻むには、大地にしっかりと根を張りいかなる状況においても揺らぐことなく自分の道を貫く一本の筋の通った精神が必要であり、それは人格に繋がるものでもある。人格と言うものは、形でなぞらえてみれば、一本の大きな樹木のようなもの。完成した大人の人格とは、樹木に例えれば、枝が均等に伸び、葉が豊かに茂り、綺麗に伸びた一本の木をさす。女性の生涯発達においてもどのように自分の根幹をしっかりと据え樹を育てていくかが重要になる。

そこで、日本において隔世の感のある中で、女性が自立して仕事をもつことが大変だった時代、女性たちがいかに時代を切り開き自分の道を歩んでいったのか、各分野の第一線で活躍された先達の軌跡を追うことによって、現代女性のアイデンティティの確立と気品ある社会力「ヒューマンイズムの精神」の構築、社会力における女性の知的自立と知的雇用能力の獲得を検討する。そのことによって、女性の生き方について、示唆を与える切っ掛けとしたい。

## II. 研究経過と考察

### 1. 「人生の樹をどう育てるか」

現代は、自由社会であるが、自分の行動規範に従って責任をもって行動することが自由社会の基本とされる。このような自由社会が成り立つためには、各人が他人の生活利益を不当に侵害しない限り、自由に行動することが保証されている必要があり、不当な侵害行為については、公権力でこれを排除できるという原理（侵害原理）が承認されなければならない。

先達の生きた時代は、自由社会とは程遠く「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割観が存在しており、女性の一生は固定的で画一的なものであった。

人間の一生は、歴史と文化の制約を免れることはできない。歴史という時間軸と文化という空間軸のなかに無限の人々の人生が存在する。

自由社会といわれる現代にほど遠い時代の中で、自由社会としてあるべき人間の行動を選んだ女性たち。その先達たちの軌跡には、逆境を乗り越え、自分の行動規範を根底に自分で臆せず道を切り開き自分らしく生きた数々の足跡が残されている。逆境は時には大きな波であり、また自分らしく生きるための大きなチャンスという分岐点でもあった。先行きに展望の見えない時代のなかで、逆境をどのように強く生き抜いてきたのか。明治・大正・昭和・平成の時代を駆け抜けた先達の人生を辿りながら、先達を通して女性のアイデンティティの確立を分析する。

### 2. 先達女性の生涯における発達過程と分岐点

#### (1) 加藤シヅエの人生の樹

明治・大正・昭和の時代を生き抜き更に平成の時代をも歩みを進め104歳という足跡を残したわが国における女性解放の先駆者である。人生の中で「自分を磨くこと、人を本当に好きになること、そして愛する人の子どもを産むこと。この三つが同時進行で人生の中で実現することが、私の夢でした。それがかなえられたとき、私は、世界中で一番幸せな母親の一人になりました」という言葉を残す（加藤シヅエ, 1996）。

加藤は、日本のために、そして日本女性の地位の向上のために生涯をかけ貢献した。初の女性国会議員として封建的家族制度の改革をはじめ、人工中絶の合法化、売春防止法の制定など、女性の法的権利の確立のために尽力した。その人生は、自己との闘いと努力の積み重ねの結果であり“ひとりの女の生きる姿勢”は、明治・大正・昭和そして平成を色濃く生き抜き生涯現役の精神は豊かな年輪となり大きな樹として、その思想や精神は没後も後世へと受け継がれている。

#### 〈人生の樹の構築過程と分岐点〉

明治30年3月2日、加藤シヅエは雛祭りの前日に本郷西片町の家で、帝国大学の第一期の工科出身のエンジニア廣田理太郎と東洋英和女学校出身の敏子とのあいだに生まれた。加藤は、両親を著書の中で次のように捉えている。父は、封建的、保守的なものを固守し、家族の伝統に高い誇りを抱いていた。母親は、立居振舞いが純日本的で、決して不快な表情を人に見せない「忍耐」と「抑制」を理想としており、「女が身につけるものは何よりも忍耐強さです。どんな境遇でも、我慢できれば必ず幸福になれます」ということが口癖

だったとしている（加藤シヅエ・加藤タキ、1989）。

1890年代後半において文部省は、良妻賢母を国家公認の女子教育理念として制定した。これは家族制度の下で女性の生き方を強く規制するものであり、女性はひたすら家を守るという枠にはめ込まれていた時代でもあった。

実業家の家に生まれ、日本と西欧文化の両方に接して育つことにより、人生において早くから精神的・思想的な目を開くことになった。12歳の頃に読んだジャンヌ・ダルクの偉人伝に感銘を受け「国や人のために尽くす人になりたい」と心に刻み、生涯加藤の精神のルーツとして存在し続けた。

大正3年17歳で石本恵吉男爵と結婚、渡米しマーガレット・サンガーに共鳴、帰国後、産めよ殖やせよという時代に日本産児調整連盟を設立、女性解放運動を展開、男爵との離婚、加藤勘十と再婚、女性初の衆議院議員選挙当選、28年間活躍した政界を引退その後日本家族計画連盟会長、昭和63年国連人口賞を受賞するなど多くの足跡を残し、平成13年12月22日104歳の生涯を閉じる。

この104年の生涯において、分岐点となる出来事を踏まえて考えてみると、以下の10の時期に分けることができる。

① 和魂洋才の父親と進歩的な家庭 誕生から女子学習院時代（17歳まで）。

一緒に過ごした帝大生の叔父から聞いた偉人伝ジャンヌ・ダルクとの出会い。この時の思いを著書の中で「私も大きくなったら、お国のためにお役に立つような人間になろう」という言葉で表現している（加藤シヅエ・加藤タキ、1989）。この思いは、生涯の精神のルーツとして存在し続けた。

② 大正3年、17歳で石本恵吉男爵と結婚。三井鉱山三池炭鉱での新婚生活。

労働者救済の理想を抱える夫は、九州の三池炭鉱に技師として赴任。その地で新婚時代を過ごしながら、悲惨な炭鉱労働者の生活を知る。これはお嬢様育ちとしては、一大転機となった。極貧状態に生きる女たちに母性はなく、温かい母性愛が生まれてくるには、まず人間にならなくてはならない、そして女にならなくてはならないと17歳のシヅエは考えた。貧しさと子沢山のいたちごっこという非人間的な暮らしを直視したことが、その後のシヅエの思想と行動の原点となった。20歳までに2人の男の子を出産。

③ 夫と共に渡米。婦人運動家マーガレット・サンガー夫人と出会う。（23歳）1919（大正8）年。三井鉱山三池炭鉱時代の炭鉱労働者の悲惨な生活と多産地獄の体験が、マーガレット・サンガーとの出会いによって「日本産児調整研究会」設立へとつながっていく。帰国後、日本産児調整連盟を設立し、女性解放運動を展開。人民戦線事件で検挙される。

④ 男爵と離婚（47歳）正式に離婚するまで9年の歳月がかかった。

戦前の家族制度の下では離婚は両性の合意というよりは、家同士のつながりが重視された。華族が離婚する場合は、身内二人が保証人になって書名捺印の上、宮内省に届け出て、許可を得なければならず、当時離婚は家門の恥とされ、誰一人保証人になつてくれず、石本とは、他人同士でありながら戸籍上は妻という不合理な状態に縛られ、保証人を得るまで10年近くかかった。再婚相手の加藤勘十と再婚するのにこの問題が長く大きな問題となつていった。

⑤ 1944（昭和19）年、加藤勘十と再婚。（47歳）華族の身分を捨てて、労働運動の指導

者、加藤と再婚。

「人生は社会的な意義を持った大きな目標に向かって生きるべきで、その目標に向かって共に闘っていこう」という加藤の生きる姿勢への共鳴が二人を一つにした。ここで、二人の両方のエネルギーのもととなるのが本当の愛情であることを知る。

⑥ 1945（昭和20）、娘・多喜子誕生。（48歳で出産） 夫勤十は53歳。

夫婦ともに再婚で、人生の折り返し点を過ぎての出産となる。本土は B29 の爆撃にさらされていた当時、高齢出産に挑んだのは、二人の間にどうしても子どもが欲しいという思いからであった。

⑦ 1946（昭和21）年、シヅエ49歳。戦後初の総選挙において、女性初の衆議院議員当選。夫婦共に国会議員として活躍しながら多喜子を育てる。おしどり政治家夫婦の生活が始まる。28年間国会で活躍。

⑧ 1974（昭和49）年 政界引退。（77歳）

⑨ 加藤勤十死去。（シヅエ81歳。）

⑩ 1988（昭和63）年 国連人口賞受賞。91歳。

2001（平成13）年 死去。享年104歳。

#### <加藤シヅエの精神的ルーツ>

10の分岐点を想定し、加藤シヅエの人生を検討した。人にはそれぞれの人生において、もっとも大きな意味を持つ人生の転機というべき時期がある。加藤は、産児制限運動のマーガレット・サンガー婦人に出会ったことで、一生の仕事とすべき道を見つけ、日本女性の地位の向上に尽力し、全生涯を貫いて走り続けた。産めよ殖やせよの軍国主義の時代に産児制限運動は国策と相反するものであったが、それを突き進めたのは、女性の地位の向上と母子の健康を守るという加藤の使命感が大きな原動力になっている（加藤シヅエ、1989）。加藤は、愛も仕事も子育ても大切にしながら歩みを進めてきた女性でもある。それは決して平坦な道のりではなかったと思われるが、壁を乗り越えるために常に揺るぎない加藤独自の一貫して通す筋金が根底にあるように思われる。それは、自律と努力・目的をもって生きることそして人への深い愛情である。加藤は、困難を乗り越えるごとに心の強さと柔軟さを育くんでいる。そして歳を重ねても常に使命感を忘れずに老熟期の階段を静かに上りつめ最後まで社会への提言を発し続けた。

日本における女性解放の先駆者・加藤シヅエという一人の女性の軌跡は、これからの女性の生き方に大きな指針を与えるものであると考える。

#### (2) 柳原白蓮の人生の樹

柳原白蓮（1885－1967）こと、宮崎燐子（旧制・柳原）は、大正から昭和にかけて活躍した歌人であり、大正美人の一人として数えられている。父は柳原前光伯爵、母は、旗本・新見豊前守の娘で柳橋の芸妓となっていた奥津りょうである。さらに、前光の妹・愛子が大正天皇の生母であることから大正天皇のいとこにあたる。成人するまでに生母、戸籍上の母、里親となる乳母、そして養女となる嫁ぎ先の母と4人の母親がいるなど、その出自や生涯、特に前半の波乱に富んだ人生は注目されている。

白蓮は、生涯で三度結婚している。一度目の結婚は1900（明治33）年、15歳のとき、縁



続きの華族であった北小路資武と、二度目は1911（明治44）年25歳の時、50歳であった九州の炭鉱王伊藤伝右衛門と結婚した。この二度目の結婚の間に当時学生であった白蓮より7歳年下の宮崎龍介と出会い、不倫の末に結婚している。これがいわゆる「白蓮事件」である。この三度目の結婚で、龍介の病気や経済的困難さはあったものの、比較的平穏な家庭を築くことになる。白蓮は、歌人としての活動の他に、小説、戯曲、随筆、評論など、幅広い文筆活動を行っている。また、最後の夫となった宮崎龍介と共に、弱者の権利擁護などの社会活動や日中交流、そして、長男の戦死をきっかけとして平和活動に従事し、充実した後生を送った。

#### <人生の樹の構築過程と分岐点>

白蓮の人生をその分岐点となる出来事を踏まえて考えてみると、以下の7つの時期に分けることができる。

##### ① 誕生から里子。（里子に出されたのは1歳から7歳）

生後まもなく柳原家に引き取られ、次女として入籍。その後、里子に出され育つ。

##### ② 結婚（15歳）及び幽閉（20歳から23歳）。

15歳で北小路資武と結婚。功光を儲けるが、義母に取り上げられ、唯一の望みである夫婦関係は愛情のないものであった。自らの意思で選択し行動することが許されず、家のしきたりや体面に拘束され、頼るべき場所がない現状の中で、真実の愛に飢えを覚えるような環境での生活をおくっていた。また、この時期に、出生の事実を知ることになる。

20歳で離婚し、義母である柳原初子に引き取られるが、出戻りは恥とされる時代であったことから約4年間正月以外は外出を許されない生活であった（井上洋子, 2011）。

##### ③ 東洋英和女学院入学（23歳）

1908（明治41）年23歳でキリスト教精神（カナダ・メソジスト教会）に基づいた教育を行う東洋英和女学院に入学した。ここでは、キリスト教的な背景を持つ奉仕活動にも参加しており、そのことが恵まれない人の役に立ちたいとの思いを深めることにもなった。青春時代を取り戻すかのような学生生活の中で、生涯親交が続く村岡花子と出会う。それまでの鬱々とした白蓮に明るい時代が到来した時でもある。東洋英和女学院を卒業後、白蓮は、異母兄の柳原家に戻る。

##### ④ 二度目の結婚（25歳）及び「筑紫の女王」時代

1911（明治44）年、白蓮は、九州筑豊の炭鉱王と呼ばれた伊藤伝右衛門と再婚する。夫となる伝右衛門は白蓮より25歳年上の50歳であった。身分・年齢ともに不釣り合いなこの結婚は、当時の新聞でも、スキャンダラスに書き立てられた。「白蓮」という雅号は、伝右衛門との結婚を機につけられたもので、1911（明治44）年、26歳の時から用いている（井上洋子, 2011）。

##### ⑤ 「白蓮事件」から実家での二度目の幽閉

当時東京帝大の学生、宮崎龍介と出会い恋に落ちる。1921（大正10）年、白蓮36歳、龍介29歳の時に、二人は、白蓮が伊藤家から出奔する計画を立てる。この時、白蓮は龍介の子どもを宿していた。龍介の友人が画策し、白蓮の下書きをもとに「絶縁状」が作成された。これが所謂「白蓮事件」である。世間や親族を巻き込んだこの事件の収束は容易では

なかった。37歳の時に、2度目の幽閉生活を経験する。この間に、長男・香織を出産。

⑥ 家計を支えながらの穏やかな日々

1923（大正12）年、関東大震災に遭遇するが、この時に龍介と再会する。1925（大正14）年、宮崎との婚姻届が提出。長女落苺誕生。経済的に困難な時代でもある。

⑦ 長男の戦死（白蓮60歳）から81歳までの日々

長男・香織が、1944（昭和19）年徴兵され、翌年米軍機の空爆により戦死。白蓮60歳のときであったが、戦死を知った白蓮の髪は一晩のうちに白くなったと言われる。

1946（昭和21）年、61歳。NHK ラジオに出演し、戦争で子どもを亡くした悲哀と世界平和について語った。このことが「国際悲母の会」「世界連邦婦人部」結成へと発展する。

1956（昭和31）年には、最後の歌集『地平線』が刊行される。この年には、国賓として夫婦で中国にも招かれている。

76歳で、緑内障を患い失明。脳貧血で倒れ1967（昭和42）年81歳で死去した。

<柳原白蓮の精神的ルーツ>

7つの分岐点を想定し、白蓮の人生を検討してきた。白蓮の人生において最も大きな転機は、「白蓮事件」であろう。禁断の恋は、社会に大きな反響を巻き起こし、これを境に人々の視線にさらされ続ける試練の日々が始まっている。現代のような自由社会ではなく様々な制約があった時代において、この行動は姦通罪という刑法や華族令という法に縛られ、それと闘って行かなければならないことから相当の覚悟が必要になる。しかし、過酷な試練から逃避することなく果敢に受けとめその現実の中で自らの行動規範を重視しながら、心の内を歌に綴り世の中に発し続けた。娘・落苺（2014）は、「白蓮も龍介も無口であったが、芯の強い人であった」と綴っている。幾たびの試練が、白蓮の感性をを深くし芯の強い女性へと歩みを進めることに繋がっている。試練をばねにして一人の自律した女性としての生き方を貫き通し足跡を残したのである。

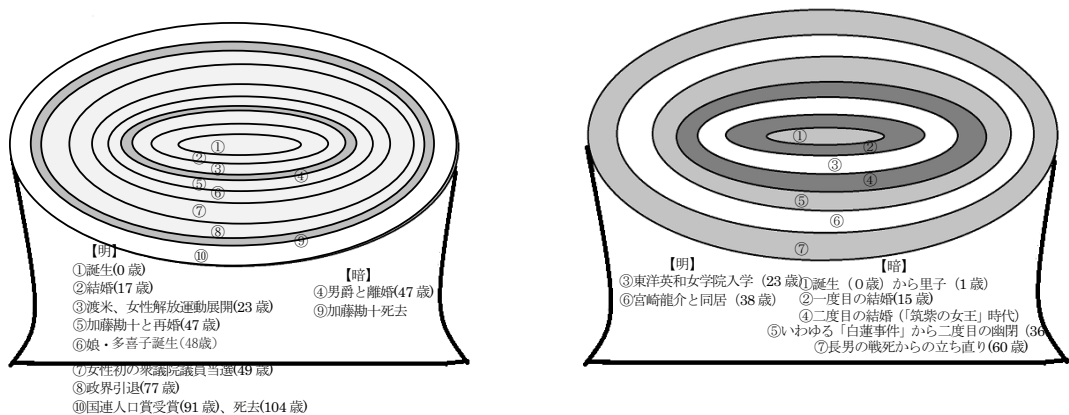


図1. 加藤シズエ・柳原白蓮 人生の樹

※ 図1に関して加藤シズエは、明の時代が多いように見られるが、これは暗の時代であっても、加藤の意志の強さで明へと変えていっている時代でもある。

### 3. 故きを温ねて新しきを知る

人の人生は、年輪にも似ている。多く刻まれた輪は、樹によって違うように、人の人生もまた喜びと悲しみの分だけ違って来る。自らの行動規範を持ちながら歩みを進めることは、いつの世においても常に勇気と努力そして強い精神力が必要になる。戦前の家制度における権威構造は、男性主導の一心同体規範を生み出した。加藤シヅエも柳原白蓮も行動規範を女性が持つことが許されない時代の中で、時代の波に飲み込まれず果敢に人生を切り開く努力を続けた先達である。あらゆる因習の壁や困難を乗り越え逞しく生き抜いたその姿は、今もなお足跡として生き続け、多くの人に人生観として指針を与え続ける要素を含んでいる。自由社会に生きる現代の女性たちは、行動規範のもつ深い意味を、先達の生きた歴史を振り返りながら考えていく必要がある。

女性の生涯発達は、非常に奥が深いものがある。さらに踏み込んで分析すべき部分を残していることは否めない。そのことを反省点とし、次年度は、面接調査を多く取り入れながら、先達の軌跡の分析を試みたい。

#### 参考文献

- 井上洋子 2011 『柳原白蓮（西日本人物誌20）』 西日本新聞社  
加藤シヅエ 1996 『百歳の幸福論：悔いなく今日を生きるための知恵』 大和書房  
加藤シヅエ・加藤タキ 1989 『「愛・仕事・子育て」すべてが生活』 大和書房  
加藤シヅエ・加藤タキ 2002 『加藤シヅエ凜として生きる』 大和書房  
宮崎蓀苳（著）・山本晃一（編集） 2014 『娘が語る白蓮』  
宮崎蓀苳（監修） 2014 『白蓮：気高く、純粋に。時代を翔けた愛の生涯』  
河出書房新社